

優秀賞

わたしのひいおばあちゃん

小豆島町立安田小学校五年 西川 祈里

「いのりちゃん、おかえり。」

ふだんから、当たり前のようにかけてくれる「おかえり」の言葉。実は、すごく安心できる言葉、うれしい言葉だったんだと気付きました。

そう思うきっかけは、わたしのひいおばあちゃんがずっと家にいてくれたからだと思います。ひいおばあちゃんとは、わたしが生まれた時からずっといっしょにくらしてきました。いつも学校から帰ってきた時や遊びに行つて帰つて来た時には、必ず、

「いのりちゃん、おかえり。楽しかった？」

と聞かれてわたしは、
「ただいま。公園で遊んで楽しかったよ。」

と会話するのが当たり前でした。この会話がわたしの楽しみでした。でも、今はひいおばあちゃんは家にいません。だから、家に帰つてもおかえりの言葉を言ってくれる人はいません。

ひいおばあちゃんは、今年の一月に入院しました。私たち家族が、一昨年の夏に新型コロナウイルスにかかり、うつさないようにしてきましたが、うつてしまいました。それから体調をくずしやすくなつてしまったのです。

ひいおばあちゃんは、昔はかん護師をしていて、一生けん命働いていたそうです。仕事を辞めてからは、しゅ味で畑仕事をしていました。季節の野菜をたくさん育ててしゅうかくしていました。夏には、

「いのりちゃんの好きなトウモロコシを植えたから、できたらいっしょにしゅうかくしようね。」

と言つて、小さいころは、よくいっしょにしゅうかくのお手伝いをしていました。畑仕事をしているときはとても元気で、足こしもしつかりしていました。

コロナにかかつてからは、家でも転ぶようになつて起き上がれなくなるこどが日に日に多くなりました。はじめは、転んでも自分で立ち上がることができていました。

せんたく物を取りこんでいたある日、ひいおばあちゃんは庭で転んでしまいました。わたしが学校から帰つてきて、「ばあば、どしたん。顔から血が出てるよ。」

と聞くと、

「庭で転んだんよ。血出てるか？」
と言つていました。わたしは、顔にばんそうこうをはつてあげました。

別の日、ひいおばあちゃんは転んで

しまつても自分で立ち上がれなくなり
ました。お母さんと弟と三人で立てる
ようにサポートしました。わたしが学
校から帰った時に転んでいることがあ
り、弟と二人で起き上がらせることが
あったり、それでも難しいときはお母
さんに連絡して帰ってきてもらったり
することもありました。毎日、そんな
生活になつてしまい、わたしはつらく
てなみだが出る日もありました。そう
した日々を送っていると、ひいおばあ
ちゃんは救急車で運ばれて、そのまま
入院することになりました。学校から
帰ってきてても、いつもいたはずのおば
あちゃんがいないのが、とてもさみし
かったです。

「おかえり。」

と笑顔でむかえてくれるのが、本当は
すごく安心できたし、うれしかったん
だと初めて気付きました。

入院してから一カ月たつてから、初
めてお見まいに行きました。ひいおば
あちゃんはともうれしそうな顔をし
てくれました。

「いのりちゃん、元気だった？」

と声をかけてくれて、

「元気だったよ。」

と答えました。

そこから、休日に野球の練習や試合
があることを話して、家にいるときと
何も変わらないひいおばあちゃんです
た。

夏休みに、もう一度お見まいに行く
ことができました。久しぶりに会つた
わたしの顔を見て、おばあちゃんは不
思議そうな顔をしていました。わたし
のことをわすれているようでした。シ
ョックでした。

「いのりだよ。いのり分かる？」

と何度も声をかけました。それでもひ
いおばあちゃんは分かかっていないよう
でした。でもわたしは、八十四才にな
つたひいおばあちゃんのことなのだ
きです。

また、お見まいに行きたいと思いま
す。その時には、わたしのことを思い
出してくれるといいなと思います。今
までひいおばあちゃんがわたしに「お
かえり。」と言ってくれたように、次は
ひいおばあちゃんが家に帰ってきたら、

笑顔で「おかえり。」とひいおばあちゃ
んに言つてあげたいです。